

# ペプシノーゲンって？

## ペプシノーゲンとは？

ペプシノーゲンは胃粘膜から分泌される物質で、胃液に含まれるペプシン（たんぱく質を分解する酵素）の元となっています。ペプシノーゲンは胃粘膜が委縮した状態になると低下するため、血液中のペプシノーゲンを測定することで**胃粘膜の萎縮度（老化度）**をみることができます。



## 萎縮性胃炎とは？

胃の慢性的な炎症が長い間続くと、胃酸を出す胃腺が収縮し、胃粘膜が薄く血管が透けてみえるようなペラペラの状態になります。この**胃粘膜が萎縮した状態を『萎縮性胃炎』**といいます。萎縮性胃炎が進行すると**胃がんになるリスク**が非常に高くなります。そのため、萎縮性胃炎をいち早く発見することが胃がんの早期発見につながります。

# ABC 検診がオススメです

ABC検診とは、ピロリ菌抗体検査とペプシノーゲンを測定し、その組み合わせから胃がん発生のリスクを分類し評価する検診です。

	A 群	B 群	C 群	D 群
ピロリ菌抗体 検査	—	+	+	—
ペプシノーゲン 検査	—	—	+	+
胃がんリスク	低			高

### ※D 判定について

胃粘膜の萎縮が高度に進行すると、ピロリ菌抗体が陰性となることがあります。これはピロリ菌の自然排菌の他、加齢などにより抗体価が低下した場合があります。そのため、内視鏡検査等で萎縮性胃炎の診断がついた場合はピロリ菌抗体検査以外の方法（尿素呼気試験・抗原検出など）を追加で実施すべきだとされています。